

ODA

ピアネット・イルカ

つうかん
ODA通巻 : 1456



発行 社会福祉法人
沖縄県身体障害者福祉協会

編集人 NPO 法人沖縄県自立生活センター・イルカ

住所 〒901-2221 沖縄県宜野湾市伊佐4-4-1 (1F)

単価 100円 (会費に含)

TEL 098-890-4890
FAX 098-897-1877

もくじ 目次

- 2 ページ.....^{いとうときお}伊藤時男さん^{かいがアンドし}絵画&詩^{てんらんかい}の展覧会
- 3 ページ~4 ページ.....シンポジウム

かい が アンド し てんらん かい

絵画&詩の展覧会

この度、伊藤時男さんによる、絵画&詩の展覧会に生活介護のメンバーと参加してきました。伊藤さんは、国による隔離収容政策により、精神病院で40年にわたり長期入院をしていました。

中学校時代より絵や詩を描き続けており、その絵や詩を皆で見してきました。コロナ禍ということもあり、密を避けるため、7月14日(木)、15日(金)の2日間、2グループに分かれて時男さんの展覧会を見してきました。

長期入院で大変だったにも関わらず、たくさんの素晴らしい作品があってとても感動しました。

私にも、「あの様に人を感動させれる絵が書けたら良いのに」と、うらやましくなりました。

カベいっぱい、絵がかざっていてすごい！



シンポジウム

7月18日(月)、沖縄県福祉連合会、日本精神衛生会、沖縄県自立生活センター・

イルカの主催で、「第78回精神保健シンポジウム 施政権50年—未来への回想 国による隔離政策を考える」が開催されました。酷暑が続く中、約200名余りの方がご来場下さりました。



午前中には、沖縄県各地で行われていた私

宅監置について扱った映画「夜明け前のうた 消された沖縄の障害者」が上映され、当時の私宅監置被害者が6畳にも満たない木組みやコンクリート造りの小屋での生活を強いられていた事、本人と家族・地域が分断されていた事など、かつて障害者が人としての尊厳を踏みにじられていた歴史を共有しました。



本シンポジウムには、40年余り長期入院を強いられたとして国賠訴訟を起こしている伊藤時男さんをゲストとしてお招きしました。伊藤さんは10代の頃に精神疾患を発症し、医療保護の名の下で入院生活を余儀なくされます。転院しながらも地域へ帰ることは

叶わず、2011年の東日本大震災で起きた福島第一原発事故をきっかけに、当時入院していた病院から退院しました。

伊藤さんは長い病院生活を振り返り、「全てがグレー色の世界」と表現しています。一日も早く地域へ帰りたいという一心で療養に励みましたが、退院の機運が高ま

ると、処方される薬が変えられ症状が悪化するなど、不可解な事もあったと伊藤さんはおっしゃいます。自由のない病院生活に我慢できず、何度か脱走を試みる事もありましたが、親族に連れ戻されたりと地域への復帰はやはり叶いませんでした。

このまま病院で一生を暮らすのだろうかという絶望は、当時の伊藤さんだけではなく今も長期入院を強いられている患者の皆さんも味わっている物です。人生のほとんどを、行きたい所も、食べたい物も、会いたい人も、やりたい事も自分の意思で決められず病院で過ごさなければならない。自

分の身を置き換えて考えられるでしょうか。いかな

る障害を持っていても自由を奪われていいはずがな

く、「精神病患者は地域で生きるのは難しい」と社会

から突き放されている状況は、当事者だけでなく私

たち一人一人が見つめなければならない現実だと感

じています。

今回の精神保健シンポジウムをきっかけに、日本の

精神医療における社会と隔絶される精神病棟の閉鎖性に焦点を改めてあてると共

に、個人・地域・社会がこれからの精神医療の在り方について考えていければと

おもいます。

